れき　みん
となん歴民だより vol.66

Morioka tonan history and folklore museum　令和３年７月 15 日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢 1-1-38　Tel/Fax 019-638-7228

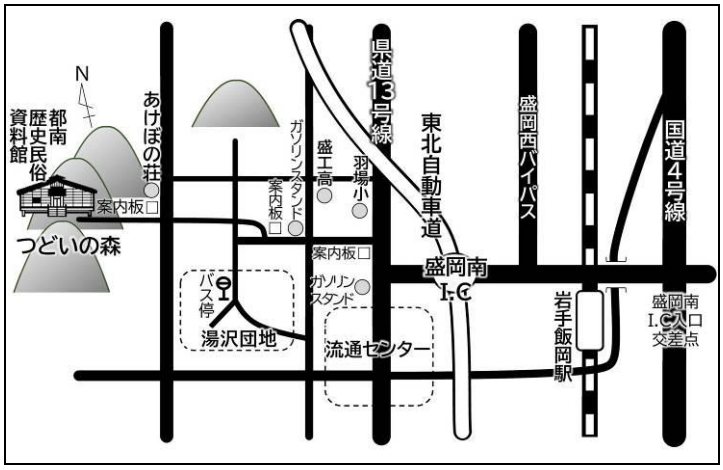
是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

○収蔵資料展「書物の世界」のお知らせ
○資料は語る(66)
○盛岡市所在指定･登録文化財紹介(66)
○となんの先人⑨

MAP☆ACCESS

★「都南つどいの森」の案内板を目印にお越しください★



○利用案内

開館時間
午前９時から
午後４時まで

入館料
無　料

休館日
月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）、年末年始

収蔵資料展「書物の世界」のお知らせ

都南歴史民俗資料館では，近世から近代にかけて出版及び筆写された書物を数百冊収蔵しています。そのほとんどが普段は収蔵室におさめられており，日の目を見る機会が多くありません。そこで，収蔵資料を活用するため，令和３年６月 19 日（土）～８月 29 日（日）の期間，収蔵資料展「書物の世界」を開催いたします。

宝生流謡本

書物は，文化の発展と密接に関わっています。特に近世日本では，戦乱の世が治まったことから文化活動が活発になりました。印刷技術が確立されたこと，事業としての出版が可能となったこともあり，それまで限られた層のものだった書物が幅広い人々に行きわたるようになりました。識字率が上昇し，多種多様な本が出版され，書物は身近なものになりました。

都南地域にもさまざまな本が持ち込まれ，読まれたであろうことは，当館におさめられた数多くの刊本や写本を見ると想像に難くありません。本展では，都南地域や周辺地域のお宅から寄贈・寄託された書物を，仏教関係，往来物，歴史・物語などに大別して展示し，それらを通して当時の文化を紹介します。

書誌学とは

本展では，はじめに書誌学の初歩をご紹介します。

書誌学の「書」は図書・書物を表し，「誌」は「誌す＝シルス」つまり「書く」という意味です。「書誌学」は「図書・書物について記述する学問」です。ここでいう「誌す」とは，ある特定の図書を詳細に観察し，大きさ，製本の具合，表紙や用紙の色合い，綴じ糸の種類，標題の標記の仕方，蔵書印の有無などについて所見を記述することです。

書誌学は，書物の内容ではなく，書物の外型を扱います。なぜ外型にこだわるのでしょう。

仮名垣魯文『英名八犬士』より 芳流閣の決闘

中野三敏（なかのみつとし）氏は，武士や町人，百姓は服装を見れば一目で身分を見わけることができるように，江戸時代の書物は，外型を見ただけで大まかな内容・種類と時代の見当がつけられると述べています※。和書の外型に着目することは，内容を知ることにつながるのです。

図書の外型を観察すると，さまざまなことが推測できます。刷りの様子や書写本を比較することにより原本とその伝播に関する研究ができます。あるいは版式・装訂・活字・紙質などの判定により作られた場所・年代を推定できます。これらは，その書物のもつ内容的文学性，心的作用，他の資料に与える影響などを解明するための基礎となります。書誌学はその補助をする学問なのです。特定の文字資料を識別して，その資料のもつ意義と位置付けを行うのが書誌学の目的です。

※　中野三敏『書誌学談義　江戸の板本』岩波書店，1995 年

都南歴史民俗資料館の資料

①仏教関係

当館に収蔵されている書物には，高僧の伝記など仏教にまつわる内容のものが多く含まれます。

『往生要集』（旧蔵者：乙部地区）

『往生要集』（旧蔵者：飯岡地区）

『往生要集』

源信（恵心僧都）著。
寛和元年（985）成立。
さまざまな経典などから要点を抜粋したもの。日本の浄土教の基礎を確立した書である。

また，「小泉祐山」という人物の著書も多数あります。

小泉は隠し念仏に関わった人物で，明治 37 年（1904）6 月 21 日に没しました。岩手県立図書館などにも著作物が収められています。平成 12 年（2000）当時の当館職員の調査により，父親は飯岡地区ゆかりの人物であることなどがわかっています。

これまで当館資料のうち小泉の著書が認められたのは，永井地区のあるお宅の資料群の中に限られていました。しかし，平成 27 年（2015）に盛岡市猪去のあるお宅から寄贈いただいた和書にも小泉の著作が含まれていました。両家資料には題名がほぼ一致する書物もあるため，今後比較検討を加えることで小泉の活動の範囲や様子を掴む手がかりになる可能性があります。

②往来物

往来物とは，書き方の範例集の形式をとった初等教育用の教科書です。往復の手紙文を例文としているため往来物と呼ばれます。往来物で学ぶことにより，文字を覚えると同時に言葉やその使い方，一般教養を身につけることができました。紙面を２段に区分けし，上段に諸知識，下段に手紙文を掲載するものもあります。

古くから存在していましたが，特に江戸時代から明治初期にかけて『消息往来』『庭訓（ていきん）往来』など多様な種類が出版され，寺子屋教育や初期近代教育の教材として広く使われました。

都南地域のお宅にも『商売往来』『農業往来』のほか，多様な学びの書物が多数保管されていました。

③歴史・物語

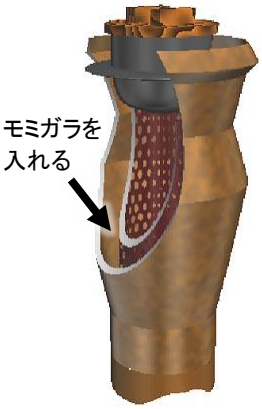
人々に長く語り継がれた歴史上の出来事として，赤穂事件が挙げられます。殿中での刃傷事件に端を発し，大石内蔵助ら四十七士が吉良上野介邸に討ち入ったこの事件は，当時大きな論争を巻き起こし，忠義とするか罪とするか，儒学者たちが議論を戦わせました。罪と判断され浪士たちは切腹を命ぜられましたが，庶民の間ではこの仇討ちは忠義の行いとしてもてはやされ，史実にフィクションを織り交ぜたかたちで人形浄瑠璃や歌舞伎の題材となり人気を博しました。

右の表は当館収蔵の「忠臣蔵」関連の本です。『仮名手本忠臣蔵』は代表的な作品で，幕府を憚（はばか）り時代背景は『太平記』の頃，登場人物は大石内蔵助を大星由良助などと変更しています。いずれも明治期以降のもので，時代が変わった後も忠臣蔵関連の本は多くの種類が出回り，大切に書き写し読まれていたことがわかります。

書名		旧蔵者
仮名手本忠臣蔵	版本	盛岡市内
敵討義士伝	版本	盛岡市内
赤穂忠義伝	写本	下飯岡
赤穂義臣伝	写本	西見前
誠忠武鑑	写本	西見前
赤穂精義内侍所	写本	永井

資料は語る⑥⑥

【 ヌ カ 釜 】



断面図

籾殻（ヌカ）を燃料にご飯を炊く道具である。乾燥した籾殻約10リットル（５升）を入れ，点火すると30分ほどで炊き上がる。

稲の脱穀で排出される籾殻を利用するため，東北地方や新潟など米の産地で，昭和30年代頃まで使用された。

10代の頃に実際に使用していたという，現在70代の方にお話をお伺いした。両親が田畑に出て働く間，米を炊いておくのが子どもの頃の仕事だったという。目印の線までヌカを入れ，米を研いで水加減をした羽釜を設置し，点火する。ヌカの燃焼経過や加減が米を炊くのに適しており，竈炊飯のような難しい火加減調節は必要なく，子どもでも簡単に炊けたという。そのうえ，味も良かったとのことである。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介⑥⑥

県指定有形文化財　工芸品

槍　銘 濃州之住長俊

所蔵ならびに写真提供：岩手県立博物館

盛岡藩３代藩主南部重直が会津藩主加藤嘉明の娘と結婚する際に，加藤家から贈られたと伝わるものです。加藤嘉明は豊臣秀吉に仕えた武将で，賤ヶ岳七本槍の一人に数えられています。

「放下通し」や「唐頭」との別号があり，南部家では家宝として大名行列の先頭に飾ったといいます。

平三角の笹穂槍と呼ばれる笹の葉形をした槍で，刀長は26.0cmあります。鍛えは板目肌が流れ，刃文は乱れ交じりの直刃です。茎の三角側には銘を切ります。作者の長俊は室町時代の美濃国（現在の岐阜県）の刀工です。

参考文献：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)
岩手県立博物館デジタルアーカイブ

となんの先人⑨　佐々木　初太郎

佐々木初太郎は、昭和初期の、乙部地区りんご栽培第二期ともいうべき時代を支えた人物である。

佐々木は明治十八年（一八八五）乙部村に生まれた。同三十八年（一九〇五）に青森五連隊に入隊し、除隊後は役場に入り収入役二期を務めると辞職した。

佐々木は入隊当時に見聞きした「青森りんご」の魅力にとりつかれ、果樹栽培が将来有望であることに気がついていた。そこで、まず同志を見つけるため、集会の度ごとに人々の勧誘につとめた。佐々木自らりんご栽培を手がけるようになると、近隣の人々もりんごに関心を示し、勧誘に応じるようになった。

乙部村では、大正初期には既にりんご栽培が行われていた。いわば第一期である。大萱生鉱山や日詰町方面に担ぎ売りしていたが、作付面積は小規模で、樹数も大ヶ生・黒川・乙部・手代森を合わせてもりんご五千七百本、梨は四千八百四十本に過ぎなかった。増植する人もいなかったため廃れる一方であった。

第二期果樹振興の第一歩として、大正十四年（一九二五）三月、佐々木は乙部村果樹組合の設立に踏み切り、会員四十五名を集め初代組合長に就任した。以降、親切、寡黙、沈着の実行家である彼は、事業として苗木の増植・改植などの振興対策に取り組み、着々と成果を出した。

昭和十三年（一九三八）には組合員は九十人を越え、栽植樹数は当初の千二十本から約十倍の一万五百四十本となり、面積も四十余町歩にまで拡大した。明るい希望がもてるようになった矢先、佐々木は過労がたたり、同年十月十五日に病気のため四十五歳で逝去した。

昭和四十六年（一九七一）、岩手県りんご百年祭が盛大に行われた。同年は佐々木の三十三回忌に当っており、乙部地区果樹振興功労者追悼会が施行された。

参考文献：都南村誌編集委員会『都南村誌』都南村、一九七四